

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 5 日現在

機関番号：16301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370729

研究課題名(和文) 特別支援学級での外国語活動：その質的および客観的評価法に関する基礎的研究

研究課題名(英文) A study on a qualitative and objective assessment tool for foreign language activities: Focusing on Japanese elementary school students with special educational needs

研究代表者

中山 晃 (NAKAYAMA, Akira)

愛媛大学・教育・学生支援機構・准教授

研究者番号：70364495

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：小学校の特別支援学級でも実施されている外国語活動について、児童・生徒の特性に応じたアクティビティ開発に際しての留意点とその実践、さらに教育効果測定のための評価法の在り方や質的及び客観的方法に関して検討してきた。心理検査の結果を踏まえて、個別の支援計画との連動の下、パフォーマンスを評価するルーブリックを作成したことで、教員による丁寧な学習プロセスの把握だけでなく、児童・生徒本人による学習プロセスへの気づきが促されることが示唆された。

研究成果の概要(英文)：To evaluate not only how well the students understood the target activities but also their performance in class, we created an assessment rubric on the subject "Foreign Language Activities." It consists of four items on speaking and communication activities, and each item has three different descriptors according to three levels: foundation, developing, and advanced. Descriptors are a kind of scoring guide used to evaluate the quality of students' constructed performance. Students can prepare and participate in the activities by using this rubric because it clearly provides them with a visual, cognitive map and learning tool for them to understand what they are required to do in the class. We can use this rubric not only as a scoring guide for teachers but also as a learning guide for students.

研究分野：英語教育

キーワード：早期英語教育 外国語活動 特別支援学級

1. 研究開始当初の背景

グローバル化が進む国際社会の中で、特に欧州においては、特別な教育的支援を必要とする児童・生徒が就職等、社会生活で不利益とならないように、第二言語習得研究などの研究成果を踏まえながら、外国語教育（特に英語教育）を積極的に実施している（Kormos & Kontra, 2008）。一方、我が国の現状を振り返ると、2011年度から小学校5・6年生を対象に必修科目として特別支援学級も含めて「外国語活動」が実施され、年間35時間ずつ（合計70時間）、原則として英語に慣れ親しむ時間が確保されたが、外国語活動の実践方法についての事例報告や研究発表は、通常学級に関するものがほとんどであり、特別支援学級の担当者への支援（指導方法とその評価などの研修）が通常学級担当者以上に不十分な面があることが報告されている（中山, 2010）。

実際に、特別支援学級で外国語活動を試みている教員に行ったインタビューからも、特別支援学級で外国語活動を実施することへの不安や、人的支援の要望、さらにその意義や可能性について学びたいという声が報告されている（物井ら, 2013）。すなわち、こうした要請に対応してゆくことは、教員のみならず、特別支援学級に在籍する児童・生徒への支援につながることは明らかであり、急務な課題といえる。

こうした背景の下、特別支援学級における外国語活動も自立活動との接点を持った活動や交流学習での活動など、徐々にではあるが様々な形態で行われるようになってきた。本申請に先立つ科研費による成果でも、実践ベースの事例報告（例えば、ICTを活用することで、視覚優位の児童の集中力を高める試み等）を行っている（久保ら, 2012；塚田ら, 2013）。しかしながら、その内容は「報告」という形で、あくまで授業中の支援に関しての対処的な内容が大部分を占めており、障害の程度や特性を考慮したアクティビティ開発に対する教育的効果という点での「(質的な記述や客観的な指標をともなった)評価」のあり方に関する研究論文は極めて少ない。特に、様々なタイプの障害（例えば、LD、ディスレクシア、ADHD、自閉症スペクトラム障害など）に対応した第二言語・外国語教育についてのわが国の実践事例及び研究報告は、その性質上、実践者も少なく、また公開授業・研究発表という形で公開されることも稀であり、どのように実践し、そしてその成果をどのように評価すべきか、手探りの状態と言っても過言ではない。当然のことながら、そうした希少な実践事例や研究成果も一般に共有される機会は少なく、特別支援学級において外国語活動をするものの意義を見出すことが困難となる一因ともなっている（保護者・教員の意見）。結果として、特別支援学級における外国語活動には課題が山積しているという現状がある（物井ら, 2013）。よ

って、こうした課題への取り組みは特に有意義なことと思われる。

2. 研究の目的

本研究では、研究期間内（4年間）に下記の3つを遂行することを目的とした。

(1) 情緒・発達障害児童の外国語習得支援方法とその教育的効果に関する文献調査

(2) 障害と特性に応じたアクティビティ開発とその試行（実践）

(3) ルーブリックを含めた質的記述と客観指標の導入による教育的効果の評価とその検討

なお、これらの結果は、規程の報告書としてまとめ、かつ了承が得られた場合は、各指導案や実践の様子、評価方法をデータベース化し、これらを必要とする教員に提供できる形にする。また、国内外の各種学会等へ論文を投稿し、本研究課題のピアレビューによる外部評価と一般公開（例えば、ワークショップやシンポジウム等）を積極的に行うこととした。

3. 研究の方法

期間全体の本研究の計画・方法は、次の3段階から構成された。(1)文献・動向調査：これまで発表されてきた国内外の先導的研究を調査し、様々なタイプの障害（重複障害も含む）に対して外国語教育を行う際の方法論やその評価について理論的側面からまとめる。具体的には、展望論文の執筆と発表を行う。(2)アクティビティ開発と実践、予備評価段階：先行研究から得た知見を踏まえ、より具体的に有意義な特別支援学級における授業案とアクティビティの策定、さらにその実践と予備評価を試みる。(3)評価検討・報告段階：前段階の実践に対する質的記述と客観的指標の導入による教育的効果の評価とその検討を行い、それらの成果を学会（自主シンポジウムなどの開催を含む）や学術論文として発表する。

なお、研究授業及び、ルーブリック作成に関する上記の(2)の研究方法については、特別支援学級での外国語活動（特に情緒・発達障害）に焦点を当て、障害の程度と特性に対応したアクティビティの開発及びその評価について、調査・検討することにした。特に、外国語活動における積極的な児童のアウトプットの評価を目指しており、パフォーマンスレベルでのスキル使用について、ルーブリックを用いたアセスメントを行うこととした。具体的には、A県内のB小学校における特別支援学級にて、研究期間内の任意の1学期中に、K-ABCII又はWISC-IVを用いて、対象児童のアセスメントを行った。この結果を基に、アクティビティの内容を調整し、さらにパフォーマンスの評価を行うためのルーブリックを、特に個別性の高い項目に関して、加筆・修正を施し、2学期に実施した外国語活動の授業研究会にて、評価指標として用い

ることとした。

4. 研究成果

作成したループリックには、基盤スキル・展開スキル・発展スキルの3段階の項目を設け、それぞれに対して、個別性の低い全体向けのCan-do及びその関連した具体的表現と言語材料から、個別性の高い内容を順番に入れ込んだ。特に、個別性の高い項目には、心理検査で得られた結果と「個別の支援計画」に含まれている児童・生徒それぞれの学習目標・留意点を含めることで、教科学習を超えて、日常生活における級友や他者とのコミュニケーション関わるクオリティオブライフ(QOL)を高めるための汎用性を持たせるように工夫した。

この児童・生徒の学習目標にある個別性を考慮したループリックを使用することによって、授業参観時の評価として、終始、授業に積極的に参加しており、またアクティビティを行う際には、自ら友達を誘うなど、想定していた発展スキルのところまで、しっかりと活動できた様子を記録できたり、特に、授業者の指示を良く理解し、早とちりすることなく、活動をこなす様子などを観察することができたりと、児童・生徒の細かい学びの成果を把握するのに役立った。

その他、活動中の児童・生徒のパフォーマンスの評価においては、担当教員の感想からは、「笑顔で楽しく取り組む様子が見られ、英語に慣れ親しんでいる様子がとてもよくなってきた」、「終始、授業に積極的に参加していた。支援の先生にサポートをもらいながら、活動内容を把握し、自分の順番が回ってくると、ねらった活動をペアで丁寧に行うなど、英語を使った活動に慣れ親しんでいる様子が見えきた」、「相手の好きな食べ物と国を一致させ、英語駆使して活動を積極的にこなす様子が見えきた」等の感想が得られた。

事前のアセスメント結果によってアクティビティ内容の調整を行ったことと、児童・生徒をどのような視点で評価するのか、ポイントを絞ることができたことが功を奏したと言えよう。アウトプットの積極的な評価という事で、パフォーマンスレベルで児童がどのようなスキルを使えるようになったのかを見とれるようにループリックの評価項目を精選した。個別性の高い項目について、心理検査の結果を踏まえた項目を含めることで、実態に合った評価が行えた一方で、その運用面において、客観的な評価が複数の評価者間で統一できるのかといった課題が浮かび上がってきたので今後の課題としたい。

また、教育的な効果について児童・生徒の行動変容に関する丁寧な記述と、継続的にスキルの変容を確認するための方法として、どのようにループリックを更新すべきか等のユーザビリティについては、より深く検討したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2件)

中山 晃「小学校での教科としての英語教育の実況 (特集 小学校における英語教育のこれから - ICT活用を中心として 前編)」

『視聴覚教育』71(11) 10-11, 2017年11月

中山 晃「英語科(外国語活動)」『教育出版教育研究所 研究報告 教師アップへの挑戦 学び続ける教師・授業の中野評価と支援 編』(16) 48-53, 2016年7月

〔学会発表〕(計 5件)

中山 晃・塚田 初美・脇坂 文貴・三浦 優生・吉田 広毅。「特別支援学級における外国語活動: ルートマップ的ループリックを活用したアウトプットの積極的評価」『日本教育心理学会第59回総会』2017年10月7日

中山 晃・塚田 初美・脇坂 文貴・三浦 優生・吉田 広毅。「Developing assessment rubric for "Foreign Language Activities": Focusing on Japanese elementary school students with special educational needs」『平成29年度日米教員養成協議会(JUSTEC2017)』2017年09月14日

中山 晃。(2015)「特別支援学級での外国語活動: 評価に関する一考察」『平成27年度JACET中国・四国支部秋季研究大会』

竹村 典子・荻田 知則・中山 晃(2014)「通常学級における視覚認知に困難のある児童に対する学習支援の検討」『第28回言語発達障害研究会』予稿集 p.31

足立 友菜・荻田 知則・石丸 利恵・中山 晃(2014)「通常学級における発達障害の疑いのある児童に対する支援-合理的配慮の提供に向けた個別支援とカンファレンスの報告-」『第28回言語発達障害研究会』予稿集 p.30

〔図書〕(計 1件)

中山 晃(担当:分担執筆)「第2節 特別支援,ユニバーサルデザインの視点を生かした授業作り」(金森強・本多敏幸・泉恵美子編著)『第2章 主体的な学びをめざす授業作り(主体的な学びをめざす小学校英語教育教科化からの新しい展開)』p. 126-131, 教育出版, 2017年10月

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中山 晃(NAKAYAMA, Akira)

愛媛大学・教育・学生支援機構・准教授
研究者番号: 70364495

(2) 研究分担者

三浦 優生(MIURA, Yui)

愛媛大学・教育・学生支援機構・講師
研究者番号: 40612320

吉田 広毅 (YOSHIDA, Hiroki)
関東学院大学・国際文化学部・教授
研究者番号：40350897

(3) 連携研究者

苅田 知則 (KARITA, Tomonori)
愛媛大学・教育学部・准教授
研究者番号：40363189

(4) 研究協力者

脇坂 文貴 (WAKIZAKA, Fumitaka)
塚田 初美 (TUKADA, Hatsumi)